

神話 『ブルーポールズ』

向殿 充浩

補足説明:

シュルツェ/ヴォルスについて

この物語の第4巻にシュルツェという画家の描いた絵と詩が出ています。

この「シュルツェ」とは、20世紀の「アンフォルメル」の画家「ヴォルス」のことです。

「ヴォルス」の本名は、アルフレート・オットー・ヴォルフガング・シュルツェ (Alfred Otto Wolfgang Schulze) であり、『ブルーポールズ』においては、「シュルツェ」という名で登場させました。

私は、1978年、尼崎市総合文化センターでの「ヴォルス展」で初めて彼の作品を見て強い衝撃を受けました。まさに、魂の漂泊者とでも言えはいいのでしょうか。38歳で亡くなった彼の波乱の生涯、そして彼の残した言葉や詩とともに、その後、「ヴォルス」は私の心の中で大きな位置を占め続けました。

ヴォルスの残した詩の一文「カシスで、石や魚たち」を題名にした詩をいくつか作り、本ホームページに掲載した第3詩集『求道者たちの祭儀』に載せています。また、ヴォルスの『閉路』という絵からイメージした詩を作り、「閉路」という題名で、同じく第3詩集『求道者たちの祭儀』に載せています。(尚、カシスとは、マルセーユの近くにある港町で、ヴォルスが収容所から解放された後に過ごした場所です。)

この『ブルーポールズ』では、ヴォルスの言葉や「カシスで、石や魚たち」で始まる詩を掲載しました。また、私が「カシスで、石や魚たち」という題名で書いた詩もナユタの詩として載せました。

純粋な心が、荒れ狂う現実世界の中で苛まれる中、けれどその微かな夢が世界の涯てへと漂白するヴォルスの世界は、孤独な孤高の神ナユタの心に通じるものがあると思っています。

尚、シュルツェの絵と詩は第4巻で登場させましたが、今となっては、20世紀を舞台とした第5巻で扱うのが適切であったかもしれないとも思っています。ただ、第4巻を書いていた時には、これが最終巻のつもりでしたので、こういう形になってしまっています。

(2015年3月)